東方鼻毛伝説

キツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方鼻毛伝説

【Ｎコード】
Ｎ４７４５Ｐ

【作者名】
キツネ

【あらすじ】
先に謝っときます。ｏｒｚ
これは東方Ｐｒｏｊｅｃｔ作品でボーボボが暴れだしたらどうなるか、という作品です。とにかくぶっ飛ばします。おもしろさは保証しません。（オイ）

真説！！東方鼻毛伝説　～紅い霧から始まるディスティニー～

「暇ね……」

神社の中の居間でお茶を飲みながら、少女はぼやいた。

彼女は博麗霊夢。博麗神社の巫女である。幻想郷の平穏を保つための管理を担う者の一人だ。

はっきり言って、彼女は強い。単純な霊力でいうならこの幻想郷と外の世界とを隔てる“博麗大結界”を管理するほどで、戦闘においても並の妖怪なら一蹴してしまうくらいである。

巫女でありながら、霊夢の主な仕事は専ら妖怪退治である。特に、力のない人里の人間を襲ったり、幻想郷自体を脅かすような輩を、彼女はこれまでにも多く倒してきた。

しかしながら、霊夢の大事な物の一つでもある賽銭箱の中は相変わらず空っぽだった。脇の開いた巫女服もあいまってか、周りからは“貧乏巫女”というレッテルまで貼られる始末。

まあ今となっては当たり前になってしまったので、霊夢はもう気にしないことにしている。

閑話休題。

「あ～～～、ヒマヒマヒマヒマ～～～～！」
ゴロゴロゴロゴロ～～
畳の上でゴロゴロするほど、霊夢はかなり退屈していた。もはやたれぱんだ状態。
時々あの白黒魔法使いが茶を飲みに来たりするが、それももう日常茶飯事化しているので面白みが薄れていた。
（何か面白いことでも起きないかしら……もっとこう……ハジケるような……）
幻想郷の平穏を担う者の思考とは思えないことを考え出す始末。
それほどまでに暇だったのだ。

そんな彼女の願いは、突然叶えられてしまう。

……ブロロロロロロロロロロロ～～！
「！？」
聞き慣れない機械音が、鳥居の方から聞こえてきた。それは段々

とこちらに近づいてくる。
不可思議に思った霊夢は、口から垂れていたよだれすら気にせず飛び起き、急いで外の方に駆け出す。
外に出た瞬間、霊夢は目の前の光景に眼を見開いた。

「ヨォーシてめえら一旦止まれェッ！！」
“日本作物同盟”のヘッド、コメの掛け声でメンバーは一斉にバイクのブレーキをかける。
ギャリギャリギャリドゴォンッ
「ぎゃあぁっ！！」
しかし内一人の新米ジャガイモは止まりきれずに賽銭箱に突っ込んだ。賽銭箱コナゴナ。
「ヨォーシてめえらァ！！罪人をたてやがれェッ！！」
コメの更なる掛け声で、十字架に縛られた罪人――黄色いアフロのグラサン男――がたてられる。
「ウゥ……」
「おいテメェ！自分が犯した罪が何だったか言ってみろコラッ！！」
「……ハ……ハイ……。チン、ジャオロー、スに……ハ、入っていた……ピ、ピーマンさんを……残してしまい……ましたぁ……」

「その通ォォォり！！　コイツはウチの大事なマスコットであるピーマンに対する冒涜と同じだコラァッ！！」
「「そうだそうだァ！！」」
「ヒドイワ！！　ヒドイワ！！」

ボロボロの男は弱々しく答え、集団が煽りたて、マスコットであろう小さなピーマン（♀？）がおいおいと泣いている。

「よってぇー！！　コイツは魔女狩りの刑に処す！！　点火ァッ！！」

十字架の下にいつの間にか用意してあった牧に火をつけた。

「アッチィィィッ！！アチチアチチ！！せめてミディアムでー！！」
「うるせェ！！てめえはレアにもこんがり肉にもなれねえんだよ！！　そのまま灰になっちまいな！！」
「オーマイガー！！オーマイガー！！」
「ヨォーシてめえら！！撤収だァ！ッ！」
「「Ｙａー！！Ｈａａａａａ！！」」

ブロロロロロロ……

日本作物同盟は男を置き去りにしてバイクで去っていった。

一部始終を見ていた霊夢は、色々な思考を巡らせながら、遂に声を出した。

「私のお賽銭箱がァァァァァァァァァァッッ！！！！！」

それが彼女の精一杯のツッコミでしたとさ。

「～～～～～♪」

森の上空にて、箒に跨がった白黒の少女が鼻歌混じりに空を飛んでいた。

普通の魔法使い、霧雨魔理沙は、今日も暇なので博麗神社に向かう。主にお茶をせびりに。

目的地上空に着くや、そのまま急降下。途中焦げた場所を見つけたが、霊夢が集めた落ち葉でたき火でもしたんだろうと自己完結。

「霊夢～！遊びに来たぜ～！」

着地した後、神社の縁側から様子を伺う。

そこには“いつも通りに”茶を啜る霊夢がいた。

「こっちは来いなんて言ってないけど」

「いいじゃん。私が来たいから来たんだ」

霊夢が呆れた顔をしても、魔理沙はお構いなしだ。

そこへ、

「オ～イ！出来たぞ～！」

「！？」

普段、というか全く見たことがない黄色いアフロのグラサン男が、大工の姿で現れた。

「お、おい霊夢！コイツ誰だ！？」

「ウチの賽銭箱をコナゴナにした奴の関係者」

慌てふためく魔理沙に対し平然と答える霊夢。

「それよりアンタ、本当にちゃんと直したんでしょうね？」

「ああ、バッチリだ！」

男は得意げに作製したものを見せる。

「どうだ～、立派な犬小屋だろ～！」

「……て犬小屋じゃない！！」

「これでジローも快適に過ごせるな～。よかったな～ジロー」

「……」（↑大根）

「お～よしよし、イイコだな～」

「おい霊夢、コイツ本当に何なんだ！？」

男の意味不明な行動に魔理沙は混乱寸前である。それでも霊夢はあくまで冷静だった。

「私が頼んだのは賽銭箱よ！さっさと作り直しなさい！」

「ちっ、んだよ～折角作ったってのに、仕方ねえな」

男は残念そうな顔をしつつ、取り出したリモコンらしきもののボタンをプッシュした。

ウィーンガシャン　ギュイギュイギュッ　ガショガショ　カシャッ　ガガガガガガッ　ガシャ　プシューッ

テーレッテレー♪

すると、何と言うことでしょう！　犬小屋はあっという間に賽銭箱に大変身！！

「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっっ！！！？」

魔理沙、驚愕。

「あら、中々いい感じのになったじゃない」

「イヤイヤ霊夢おかしいだろ！！何でボタン一つで犬小屋が賽銭箱になるんだよ！？」

「これぞ科学の力じゃ！」

「科学なめんじゃねぇぇぇ！！」

霊夢は普通に反応するし、男はいつの間にか博士みたいな白衣に

着替えているしで、魔理沙には何が何だかさっぱりだった。
例え幻想郷の賢者が見合ったとしても、この状況は理解不能だろう。

「で、本格的に考えて、コイツは何なんだ？　霊夢、お前は疑問に思わないのか！？」
「そうだったわね。お賽銭箱が壊れたショックと怒りですっかり忘れてたわ」
「お前なァ……」

存在が謎な男もだが、今までスルーしていた霊夢も霊夢である。
ちなみに男は始めの恰好である、青シャツ黒ズボングラサンに戻っていた。

「それじゃアンタ、とりあえず名前は？」

「そうだな、俺の名前は、

？ボボボーボ・ボーボボ。

？ボボボーボ・ボーボボ。

？ボボボーボ・ボーボボ、

ど～れだ？」

「……いや知らねーよ。聞き返すなよ。全部同じだし」
「じゃあボーボボでいいよ」
「じゃあって何だよ。何で投げやりなんだよ」

段々やるせない気持ちになっていく魔理沙。
とりあえず名前は判明したので、霊夢たちは男……ボーボボに質問する。

「それじゃあボーボボ
「気安く呼ぶなぁぁぁぁぁ！！」
「えぇぇぇぇぇぇぇぇっ！？」
「……アンタ、見たところこの幻想郷の人間じゃないようね。どこから来たの？」
「う～む……どこからと言われると、なんとも言いようがないな。毛狩り隊やマルハーゲ帝国を完全にブッ潰してからは、流浪の旅同然だったからな」
「毛狩り隊？」
「マルハーゲ帝国？」

聞き慣れない言葉に、首を傾げる少女二人。

「……ねえ、アンタのこと、もっと詳しく聞かせて」

「ああいいぜ。先ずは何から話すか……」

さっきまでと打って変わって、ボーボボは真剣な面持ちで語りはじめる。

曰く、彼は近未来の毛の王国の出身であること。
その故郷を消し去った毛狩り隊を倒すため、旅に出たこと。
毛狩り隊を始め、マルハーゲ帝国、ツル・ツルリーナ三世、ピーマン帝国など、様々な巨悪を討ち破ったこと。
旅の道中、沢山の仲間と出会い、共に闘ったこと。
ゲーセン巡りのこと。
今日の晩御飯のこと。
最近の政治問題について。
橙かわいいよ橙。

ボーボボは、自分が経験してきた出来事を、時折おふざけを織り交ぜつつも、全て話してくれた。

霊夢は話の半分は聞き流した。

（つーか後半４つ関係ねーだろ）

心の中でツッコむ魔理沙。

「……大体はこんなところだ」
「なるほどね……。これではっきりわかったことは、アンタはこの世界の人間じゃないってことね」

そう、ボーボボはこの幻想郷とも、そして外の世界とも接点のな

い全く別の世界からやって来たのだ。

「参ったわね。別世界の人間となると、帰すことが出来ないわ」

「ええ～！！うっそぉ～！！マジでぇ～！！」

「いやぁぁぁぁぁぁ！！何でいきなりセーラー服！？」

ボーボボの奇行に魔理沙絶叫。そのツッコミに答えるものはいない。

「ま、何とかなるだろ」

「……そんな楽観的でいいの？」

「俺のいた世界の悪い奴らは全て倒した。俺がいなくても、皆は平和にやっていけるだろう」

自らの使命を果たし終えたと言わんばかりに、ボーボボはそう答えた。

おおよその話が終わったあと、ボーボボの処遇については、霊夢のところでお世話になる事となった。理由は霊夢の個人的な厚意らしいが、詳細は何故かふせられた。

魔理沙はパニクった精神の回復のため、帰るといった。

「とりあえずは、この世界のゲーセンを荒らしていくのも悪くないな」

「いや働きなさいよ。それから幻想郷にゲーセンないから」

「マジで！？」

ボーボボはかなりのショックを受けた。

「お、おい霊夢！！大変だ！！　空が……！！」

帰ると外に出ていったはずの魔理沙が慌てた様子で戻ってきた。
それを聞いた霊夢とボーボボは、外に飛び出す。

「！　コイツは……！？」
「空が……赤い！？」

ボーボボと話し込んでいたせいで気づかなかったが、空が真っ赤に覆われていた。
いや、もはや“紅い霧”という表現が正しいのだろうか。

～～～～～～～♪

『ボボボＲＰＧ　最終章
～決戦！！　デス・デビル！！～』

「なんか変なの始まった！！」

「フハハハハハ！！　よく来たな、勇者ボボボよ！　愛しの姫巫女

を返してほしくば、我を超えてみせるがいい！！」
「助けて～！！　勇者様ぁ～！！」
「いやもうメンドいからいいです」
「「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！？」」

～完～

「最低な結末だぁぁぁぁぁ！！」

「だってよぉ、もう勇者レベルＭＡＸだし～ステータス完ストしてるし～つーかメンバー勇者一人しかいねえ時点でクソゲーだし」
何か愚痴をたれるボーボボ。
「ていうか霊夢、何でお前まで姫役で出てるんだよ」
「ノリよノリ」
そういう霊夢は何故だか生き生きしているように見えた。
これからはノリがないとやっていけませんよ。
「それよりも霊夢、これは……」
「ええ……異変ね」

日常を破壊する“異変”。幻想郷を護る巫女として解決しなければならない。
しかしながら、霊夢も魔理沙も内心こうなることを望んでたかのように、胸が高鳴っていた。

「異変というなら、見過ごすわけにはいかないわね」

「それなら、俺も力を貸すぜ」
「え？」

意外な人物、ボーボボが名乗りをあげた。

「……別にアンタは来なくていいのよ。これは幻想郷……私たちの問題だから」
「目の前で事件が起きてるってのに、黙って見過ごすわけにはいかん。それに……」

「じっとしているなんざ、俺のプライドが許さねえんだよ！」

これまで様々な闘いを経験してきたボーボボの魂は燃えていた。
彼の“ハジケ魂”に火がついたのだ！

「……勝手にすれば」
「……へへ♪」

素っ気ない態度を取る霊夢も、そして魔理沙も、思わず微笑む。

「よし！　それじゃ……」
「異変解決といきましょうか！」
「いってらっしゃ～い！　夕方までには帰ってくるのよ～！」
「「ってアンタも行くんでしょーが！！」」

……こうして、霊夢と魔理沙、そしてボーボボは異変解決のため立ち上がった。
同時にこれは、ボーボボたちの壮絶な闘いの幕開けであった！

真説！！東方鼻毛伝説　～紅い霧から始まるディスティニー～（後書き）

名前：ボボボーボ・ボーボボ
読み：―
種族：人間（？）
真拳：鼻毛真拳

今は無き毛の王国出身の生き残りにして、七代目鼻毛真拳伝承者。過激な不条理ギャグとおふざけて場を制する一流の“ハジケリスト”でもある。嫌いなものはピーマン（本人いわくしょっぱいらしい）。

元々いた世界では、罪なき人々や平和を脅かす様々な強敵を打ち倒し、英雄の名に相応しい（？）伝説の超戦士として闘ってきた。その後流浪の旅をしていた時に、チンジャオロースに入っていたピーマンを残してしまった事で“日本作物同盟”の怒りを買い、何やかんやで幻想入りすることになった。“いつ”“どうやって”という疑問は、ハジケリストである彼には一切通用しない。

様々なボケはもちろんの事、それによって攻撃したりコスプレや変装をしたり味方と融合（！？）してパワーアップしたりと、彼の力は未だ計り知れない。

普段は黄色いアフロにグラサン、青シャツに黒ズボンという男気溢れるファッション。ちなみにいかなるコスプレのときでもグラサンは外さない。

作者的には完全ボケ要員として自由に動かせるからかなり使いやすいです。これ考えた人凄いですね。ナイス澤○先生！

遂に対決！！闇の妖怪　～納得したときの合言葉「そーなのかー」～

“紅い霧”という異変解決のため、霊夢と魔理沙、そして異世界からやって来たボーボボは、現在『魔法の森』を進んでいた。
この森は、他の場所と比べて魔力が満ち溢れており、珍しい生き物や植物を見かけることでも有名。まあ幻想郷においては当たり前のことであるが。

「ウホ、ウホホウホ、ウッホ」
「……」

森の人（？）と化しているボーボボを華麗にスルーする霊夢。対して魔理沙は気になって仕方がない。

「魔理沙、アンタ確かこの森のどこかに住んでるのよね」
「え？あ、ああ。私にとっちゃあここはもう庭みたいなものさ」
「バナナ、クウカ？」
「ありがと」
（もう慣れてる！？）

ボーボボがどこからか取ってきたバナナを受け取る霊夢。魔理沙、ついていけず。

「それにしても妙だな……暗いぜ」
「まあ、確かに暗くて薄気味悪い森ね」
「いやそうじゃなくて、普段よりも余計暗いっていうか……」

住み慣れた場所に違和感を覚えはじめる魔理沙。

「みいつけた♪」

「「！？」」

背後から少女の声。

魔理沙たちは一斉に振り向く。

そこには、金髪に赤いリボンをつけて黒い服を着た少女が立っていた。

「アンタ、何者？」

「アタシはルーミア」

「霊夢、コイツ……」

「ええ、“妖怪”よ」

少女、ルーミアからは多大な妖気が溢れ出ていた。

「オマエモバナナ、クウカ？」

「いらない」

バシッ

「！！」

空気を読まず森の人（ボーボボ）はバナナを差し出すが、ルーミアはあっさり

拒否。バナナを弾いて地面にたたきつけた。
「バナナ様ァァァッ！！　テメェ、何だその態度は！？　王に謝れ！！」
「アタシ、今は人間を食べたい気分なの。ねえ……」
怒りだすボーボボを無視し、ルーミアは霊夢たちに問い掛ける。

「あなたたちは食べられる人間？」

不気味な笑顔を浮かべながら。

「「！？」」
霊夢たちが咄嗟に構えると同時に、ルーミアは動いた。
ルーミアの周りに光の玉“弾幕”が展開される。
ルーミアはそれを躊躇う事なく、霊夢たちに放つ！
「ハッ！！」
「よっ！！」

「祟りじゃあぁぁ！！ツキガミ様の祟りじゃあぁぁ！！」

飛翔し余裕をもって回避する霊夢と魔理沙。逃げ惑うボーボボ。

「そのまま食べてもよかったけど、それじゃあちょっとつまらないから。いっぱい運動した後にでも食べようっと♪」

笑みを崩さず御託を並べるルーミア。それは余裕の現れか。

「霊夢、さっきのは一体なんだ！？」

流石のボーボボも、始めてみる攻撃に戸惑っているようだ。

「ちゃんと説明してなかったわね……。あれは弾幕。幻想郷では互いが勝負をする際、“スペルカードルール”に乗っとって弾幕勝負をするの。それ以外の勝負は厳禁としてるわ」

霊夢は幻想郷の勝負方法などを端的に説明した。

「要するに、俺も弾幕で闘わないといけないんだな？」

「まあそうだけど……アンタ、弾幕撃てるの？」

「ナメるんじゃないわよ！私を誰だと思ってるの！？」

「変態だぁぁぁぁ！！」

自信満々に答え、“霊夢のコスプレをしたボーボボ”は身構える。

あ、ツッコんだのは魔理沙ね。

「お兄さんが相手？　それじゃあ、いくよ！！」

ルーミアは（ボーボボの奇行を気にせず）標的をボーボボに定め、

再び弾幕を放つ！

「見せてあげるわ……私の弾幕！！」

ボーボボは手に力を込め、そして、

「『鼻毛蛇拳』ッ！！」

「「初っ端からルール無視したァァァァァァァァァァッッ！！！！！」」

無意味なポーズとともに“鼻毛”を繰り出す！

バシバシバシバシバシバシッ

「！！」

ボーボボの鼻毛はルーミアの弾幕を掻き消していく。

バシィンッ

「う……っ！？」

そのままルーミアに強力な一撃を与えた！

「な……！？」

「何だ、今の……！？」

霊夢も魔理沙も、驚かざるを得ない。

「弾幕だろうがルールだろうが関係ねぇ！！

俺が戦場に出た時は、俺の“鼻毛真拳”が火を噴くぜ！！」

「鼻毛、真拳……！？」

見たことがない、それでいて奇妙な、しかしながら華麗な技。
この場にいた少女たちは一瞬にして理解した。

（（この男、めちゃくちゃだけど強い！！））

「……フフフ♪」

それでもルーミアは笑顔を崩さない。

「お兄さん面白いね。アタシも、全力を出さなきゃね！」

そういって取り出したのは一枚の札。

「あれは……！？」

「スペルカードよ！！」

霊夢の忠告直後、それは放たれる。

「『ナイトバード』ッ！！」

あ、〇符とかないのは作者がニワカ知識だからなのでご勘弁。

ドドドドドドドドドドドッ

先程よりも強力な弾幕がボーボボたちに襲い掛かる！

「くっ……！！」

「うぉっと！？」

「ぐおぉっ！？」

霊夢と魔理沙の回避はもはや危なっかしく、ボーボボは腕を交差し全身で受けるしかなかった。

「ボーボボ！！」

「問題ねえ！！これくらい！！」

「って何でタンコブ一個で済んでるんだ！？」

なんだかんだでボーボボは大事ないようだ。

「そっちが“夜の鳥”なら、こっちは“朝の鳥”だ！！」

そういってボーボボが取り出したのは、

ニワトリ。

コケコッコー！！

「お～よしよし、今日も元気がいいなあ」

「見てお父さん！このコ卵産んでる！」

「おお！これは活きのいい卵だ～！」

ピシッ　ピシッ　パカッ
ピヨピヨ　ピヨピヨ

「まあ♪可愛いヒヨコさん」
「名前をつけてあげないとな」
「『ルーミア』なんてどうかしら？」
「ああ、いい名前だ！」
「よろしくね～ルーミアちゃん♪」

ガシッ　ヒョイ　パクッ
「「ああ！！ルーミアちゃん！！」」

ドドドドドドドドドドドッ
「「ぎゃあぁっ！！」」

ボーボボと霊夢のミニコントは、ルーミアのヒヨコ補食と攻撃によって強制終了した。

「そろそろ下らない遊びは終わりにしましょ……」

ルーミアは一気に決着を付けるため、能力を解放する！

「闇よ！！」

グオォォォォォォッ

「な……！？」

ルーミアの“闇を操る程度の能力”によって、霊夢たちの視界は黒に染まった。

「霊夢！！　ボーボボ！！」

二人の無事を確認しようと呼び掛ける魔理沙。だが、それがいけなかった。

ドドドドドッ

「うぁ……！！」

恐らくルーミアのものであろう弾幕が襲い掛かってきた。魔理沙はわずかながらダメージを受けてしまう。

（魔理沙！！　く……むやみに動けない……！！）

霊夢でさえも、この状況に戸惑ってしまっている。

（私としたことが……不様ね）

（フフフ♪次は直接食べちゃおうかな～）

対してルーミアは余裕であった。

闇の世界は自分の世界、ここまで来ればもう負けない自信があった。

（次に音がなった時は……）

「え～んママ～！！怖いよ～！！」

（！　見つけた！！）

ターゲットロック。ルーミアはこれまでよりも素早く動いた。
獲物を、血を、肉を求めるその口は大きく開かれ、

バクッ

ターゲットを、捕らえた！

不幸にも、彼女の牙にかかってしまったのは……

「ママ～！！怖いよママ～！！」

しゃべる！ボーボボ人形（中）。

「って人形ォォォォォォォォォォォォッッ！！！？」

完全に捕らえたと思ったそれは、ボーボボの偽物であった！

「ジャックオーランタン！！」
「！！　しまっ……」
バシバシィッ
「きゃあっ！！」

その隙をつき、本物のボーボボがルーミアを攻撃！

シュウゥゥゥゥ……

「！　闇が晴れた……！！」

ルーミアがダメージを受けたことで、彼女の能力が解除された。

「お前、自分も見えてなかっただろ」
「！！　どうしてそれを……！？」
「魔理沙が叫んだ時だ。音がなった直後にだけお前は行動した。つまり、お前は音を頼りにこちらの様子を伺っていたんだ」

ルーミアは完全に度肝を抜かれた。ボーボボはルーミアの能力の弱点を完璧に見抜いたのだ。魔理沙でも、そして妖怪退治ベテランの霊夢でも見抜けなかった弱点を、僅かな時間で。
数々の闘いを乗り越えてきたボーボボだからこそ成し得たことだ。

「お前が全力を出したように、こちらも奥義で決めてやるぜ！！」
「く……！！」

互いに身構えるボーボボとルーミア。しかしルーミアはダメージが大きいせいで力が入っていない。

「鼻毛真拳奥義……！！」

ボーボボの身体からオーラが溢れ出す！
そのまま駆け出し、奥義発動！！

バシィンッ
「うわぁっ！！目がァ！！」

バシバシバシィンッ
「『ボボデーナイトフィーバー』ッ！！」

ボーボボの鼻毛ラッシュがルーミアを空に打ち上げる！！

ドシャアッ
「う……あ……！」

「俺は、音ゲーも制覇してやるぜ！！」

決め台詞（？）とともに、ルーミアは意識を手放した。

「これが、ボーボボの力……！！」
「すげぇ……！！」

一部始終を見ていた霊夢と魔理沙は、開いた口が塞がらなかった。
めちゃくちゃだが、力強く熱い闘い方……このような人物は、幻想郷では見たことがない。

チリンチリーン♪
「……行くぞ」

いつの間にかママチャリに跨がったボーボボが、先へ進もうと促す。

「……私たちも、負けてられないわね」
「だぜ！」

笑顔とともに、霊夢たちは次の舞台へ歩み出す。

幻想郷で初めての闘いに苦戦しながらも、なんとか妖怪ルーミアを倒したボーボボ。
果たして次は、どんな敵が待ち受けているのか！？

遂に対決！！闇の妖怪　～納得したときの合言葉「そーなのかー」～（後書き）

名前：博麗　霊夢
読み：はくれい　れいむ
種族：人間
能力：空を飛ぶ程度の能力

幻想郷の平穏を担う博麗神社の巫女。外と幻想郷を隔てる博麗大結界を管理したり妖怪をバシバシやっつけたりと凄い人。何故か腋の空いた巫女服を着ている。面倒臭がり屋で結構自己中。割とお金にがめつい。

最近金欠病で暇を持て余していた時、突如現れたボーボボ＋αにより日常が一変する。後に発生した異変解決の為、ボーボボと行動をともにすることになる。

普段は人に興味を示さないが、ボーボボと一緒にいるときはボケに参戦したり悪ノリしたりと結構乗り気。その行動からハジケリストの片鱗を見せ付ける。

最初ツッコミにするはずだったのにいつの間にかボケに。……アレ？

名前：霧雨　魔理沙
読み：きりさめ　まりさ
種族：人間
能力：魔法を使う程度の能力

魔法の森に家を構える普通の魔法使い。白黒のエプロンドレスに

尖んがり帽子と、格好まで魔女っ娘。興味を持ったものを勝手に持ち出したり変な研究ばかりやったりと迷惑な行動が目立つが、根は真っすぐで努力家。好きなものはキノコ。

いつものように博麗神社に行くと偶然にもボーボボに出会う。その時から彼女のツッコミ道という名の苦労が始まってしまう。

割と純情な彼女はメンバーの中でも専らツッコミ担当。ボーボボたちのおふざけ攻撃に悩まされながらも、いい加減慣れてきた様子。

ボケキャラにするつもりだったのにいつの間にかツッコミに。……アレレ？

闇の妖怪ルーミアを倒したボーボボたちは、一刻も早く異変解決をすべく先を急いだ。
ようやく魔法の森を抜け出すと、目の前には霧がかった、それでいて美しい巨大な湖が広がっていた。ここは通称“霧の湖”と呼ばれている。
ちなみに霊夢の話では、幻想郷には海が存在しないようで、大きな水辺のポイントは唯一ここだけとのこと。

「あ～あ……折角森を抜けたってのに、空が紅いんじゃあ気が滅入るぜ……」
「そうね。早くこの霧を何とかしないと……」

久しく見た空は、最初の時よりも一段と紅く染まっていた。だが、ということは元凶に確実に近づいてるということだ。

「ボ～デルワ～イス♪　ボ～デルワ～イス♪」
「……何やってるんだあいつは……」

そんな少女二人とはお構いなしに、ボーボボは小船に乗って釣りを始めていた。

バシャバシャバシャバシャ
「お！コイツはでかいぞ！！」

反応あり、竿を必死に持つボーボボ。
「ぬおぉ……フィーーーッシュッ！！」
ザッパァンッ
ボーボボが湖で最初に釣りあげたのは……、

オレンジの太陽みたいなトゲトゲの生物だった。
「変なのが釣れたァァァッ！！」
もちろんこのツッコミは魔理沙ね。

「オイあんさん何してんねん！！　勝手に人んこと釣ってもうて、迷惑やと思わんとか！？」
釣られたことで怒ったのか、物凄い形相で睨んでくる謎のトゲ生物。
「「！？」」
その生物とボーボボが目を合わせた時、互いに驚愕。
「お、お前は……！！」

「そんな……まさかこんなところで会えるなんて……！！」

かつての友の再会に感動するかのように、トゲ生物は涙を流しながら叫んだ。

「ボーボボ

「リッリィーーーースッ！！！！」

ドッパァンッ

「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっっ！！！！！」

ボーボボはトゲ生物をたたきつけるように湖に返した。

「……お～いボーボボ、今のってお前の知り合いじゃ……？」

「知ラネ」

魔理沙の質問にも素っ気なく答えるボーボボ。じゃあもう気にしなくていいか。

「やいやいやいやいやーーーい！！」

「ん？」

ボーボボとのやり取りがあった直後、湖の向こうから少女の声がしてきた。

「あたいのナワバリにかってにはいってくるなんて、あんたたちマナーがなってないんじゃないの！？」

声の正体は、水色のショートヘアに大きなリボン、青色のワンピースを着て氷の羽を抱えた“妖精”であった。

「何だ、この見るからにバカっぽそうな奴は？」

「バカなんじゃないの？」

「♪B・A・K・A・バカ！！」

魔理沙の問いに肯定する霊夢、リズムに合わせて歌うボーボボ。

「バカバカいうなー！！　あたいはバカじゃなぁーーーいっ！！」

「バカじゃないって言う奴に限ってバカなんだぜ」

涙目で抗議する妖精に、魔理沙はイタズラで更に追い撃ちをかける。

「ムキィーーーッ！！　もう怒ったんだからー！！

このサイキョーの妖精チルノさまの氷で、あんたたちみんなカッチカチにしてやるんだから！！」

怒りＭＡＸになった妖精、チルノはいきなり攻撃を仕掛けてきた！！

「ちょっと待ちなさーいっ！！」

しかしその前に誰かからの待ったがかかる。
「あたいから役を奪おうなんて百年早いわよ！！　ヒロインの座はあたいのモノなんだから！！」
それは、同じく水色の髪にリボン、青いワンピースを着た……さっきのトゲ生物だった。
「うおっ！？キモ！！」
「ってか何、あの恰好？」
魔理沙も霊夢もさすがにツッコまずにはいられなかった。
「お前……やはり首領（ドン）パッチ！！」
「あ、ボーボボ！！　テメェ、さっきはよくもやってくれやがったな！！」
トゲ生物の名前を叫ぶボーボボ。
「何？　やっぱ知り合い？」
「ああ。あいつは首領パッチ。俺と旅してきた仲間の一人で、最高の相棒だ」
霊夢と魔理沙は初対面、ボーボボは久しぶりの再会という形で首領パッチと出会った。
前にボーボボの話から聞いていたとおり……やっぱり変な奴だった。
「や、やだぁ／／　相棒だなんて……アタシたちの仲だから、もっ

と呼び方があってもいいじゃない／／」

何故か照れ出すトゲ生物、首領パッチ。やっぱキモい。

「だからぁ、名前で呼んで？　オ・ネ・ガ・イ♪」

「……え？私？　じゃあ……首領パッチ

「気安く呼ぶんじゃねぇぇぇぇぇぇっ！！」

「えぇぇぇぇぇまたぁぁぁぁぁっ！？」

何故か怒られる霊夢。やっぱり意味不明だった。

「コラァーーー！！あたいをムシするなぁーーーっ！！」

そういえばチルノすっかり忘れてましたね。メンゴメンゴ。

「チルノちゃーーーん！！」

と、そうこうしてる間に更に誰かが登場。

緑色の髪を片側結んだ、チルノよりも大人びて見える少女、仮名で大妖精と呼んでおこう。

「あ！大ちゃん！」

チルノは大妖精に気づいて振り向き、彼女の愛称を叫んだ。

「チルノちゃんどうしたの？　また誰かに迷惑かけてない？」

「ちがうよ！　あいつらからさきにケンカうってきたんだから！」

チルノの指差す方を見て、大妖精は驚いた。

「チルノちゃんが二人！？」
「いや全然違うだろ！！」

「なにいってるの大ちゃん！？　あたいがホンモノにきまってるでしょ！！　しっかりして！！」
「何言ってるのよ！？　あたいが真のヒロインよ！！」
「いいや！！　あたいが本物よ！！」
「いやお前まで張り合うなよ！！ややこしくなるし、全然違うから！！」
「チルノちゃんが三人に！？」
「お前もしっかりしろよ！！」

ボーボボまでもがチルノの衣装でバトル（？）に参戦。そして大ちゃんは割と天然であった。

「大ちゃんまでホンロートーさせちゃって、もうぜったいにゆるさないんだから！！」
「ム！！　来るか！？」

今麻雀用語入ってました？

「待ってくれボーボボ！！　コイツは俺が相手してやるぜ！！」
「首領パッチ……！？」
「このおバカさんには、自分の力量をキッチリ教えとかないとな！！」

「だからバカバカいうなーっ！！」と抗議するチルノを余所に、首領パッチからは並じゃない、何かのオーラが溢れ出している。
首領パッチの“ハジケ魂”はテンションＭＡＸだ！

「……よし、行ってこい！！非常食っ！！」
「よっしゃ！！」
「非常食！？」

魔理沙がツッコむ中、首領パッチはチルノと対峙した！

「ふん！　まずはあんたからカチカチになりたいようね！！」
「うるせぇ！！　俺もテメェの、その……アレ！アレをアレしてやるかんな！！」
「いや何をどうすんのよ？」

霊夢の冷たいツッコミ。

「くらえ！！『アイシクルマシンガン』！！」
ズダダダダダダッ

先ずはチルノの先制、氷柱の弾丸が襲い掛かる！
「じゃあこっちもマシンガンじゃあぁぁぁっ！！」
ダダダダダダダダダダダッ

首領パッチはＡＫ４７で応戦！
「本物のマシンガンだぁぁぁぁっ！！」
ズダダダダダダッ
「にゃあぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

まあ氷柱が本物の弾丸に勝てるはずもなく、チルノは追い詰められる。

「今だ！ハジケ奥義！！『首領パッチのパーフェクト算数教室』！！」

キ～ンコ～ンカ～ンコ～ン♪

「おらチルノ！この数式を解いてみろ！」

３Ｘ＋７＝２Ｘ＋８

「え？　えぇっとぉ～……？？」

「何で足し算なのに答えが一桁なんだよォォォォォッ！！」

バキィッ

「イタイッ！？」

「先生！　教師が生徒を殴るのは問題だと思います！　あとその数式は足し算じゃなくて方程式で、答えはＸ＝１です！」

「ウ……！！　だ、大妖精いいんちょがいうのなら……悪かったなチルノ。先生、大人げなかったわ」

「首領パッチせんせ

「気安く名前を呼ぶなぁぁぁぁぁっ！！」

「先生！！　お腹がすいたので早弁しまーす！！」

「腋巫女ぉ！！　朝はちゃんと食ってこいって保険委員も言ってたろうが！！」

「私は給食係です！！」

「よし！！許す！！」

「ウゥ……ヒック……、なんで？　なんであたいにばっかりいじわ

るするの？」
「それは……お前が好きだからだよ！　お前のことを思ってやってるんだ！！　言わせんなよバカ……！！」
「先生……！！　せんせぇーーー！！」
「チルノーーー！！」

「ベイパーキャノン！！」
「「ぎゃあぁっ！！」」

首領パッチとチルノ（十大妖精と霊夢）によるコントはボーボボの攻撃で強制終了。あれ？２回目？

「く……あたいたちのケットーをじゃまするなーーー！！」
「なんの！！　奥義『バカガード』！！」
「ぎゃあぁっ！！やっぱこうなるのねー！！」

横槍を入れてきたボーボボに向かって氷を放つが、首領パッチを盾にして防ぐ。

「……カオスだ……」

一部始終を見ていた魔理沙は、まだ序盤だというのにもう疲れた顔をしていた。
諦めるなよ！！　なんでそこで諦めるんだよ！？　それじゃあこの先ツッコミやっていけないぞ！！　ダメダメダメダメ！！　諦めちゃダメだ！！　もっと熱くなれよぉーーー！！
「うるせぇ！！」

「こうなったら（？）ヒッサツワザだ！！」

チルノは一枚の札、スペルカードを取り出した。

「くらえ！！『アイシクルフォール』！！」

大量の氷の弾幕が、首領パッチを襲う！

「危ない！　首領パッチ！！」

「むにゃむにゃ……ちょっと待ってぇ～あと5分～……」

「って寝てるぅーーーーっ！？」

戦闘中なのに首領パッチは帽子を被って布団で眠っていた。

その間にも、チルノの弾幕が首領パッチに……全く当たらない。

「アレ？」

「前がガラ空きだったーーー！！」

そう、チルノはスペルカードの中でも比較的抜け穴だらけの技、アイシクルフォール（Ｅａｚｙ）を繰り出したのだ！

「チャンスだ！いけェ首領パッチー！！」

「おっしゃあ！！」

「チルノちゃん！！」

「あわわ……！！」

隙だらけのチルノに向かって首領パッチは奥義発動！！

「貰った！！　ハジケ奥義！！『勇気ある撤退』！！」

「なんで！？」

ズガガガガガガッ
「ぎゃあぁぁぁ冷てぇぇぇ！！」
「臆病者には死を！！」
ダダダダダダダッ
「ぐあぁっ！！」

まあ後ろにさがれば弾幕も当たるわけで。ついでにボーボボからもマシンガンの粛正がはいる。

「どうだ！あたいのだんまく！　けーさんどーりよ！！」
「嘘つけ」

「あたいったらサイキョーね！！」と誇らしげに言うチルノ。

「……なあ霊夢、ひょっとしてコイツら……」
「ひょっとしなくてもバカよ。それも極上の……」

魔理沙だけでなく、霊夢までもが頭を抱えてしまうほど、彼等は正にサイキョーのバカだ。ちなみにそのバカのカテゴリにはボーボボも含みます。
ていうか霊夢、あんたもコントに参加してるでしょーが。3回も。

「よーし！このままいっきにキメちゃうぞ！！」

チルノは更にスペルカードを取り出す。

「これでおわりよ！！『パーフェクトフリーズ』！！」

色とりどりの弾幕が首領パッチを襲う！
「へ！当たるかよそんなもん！！」
しかしその弾道は単純で、首領パッチは楽々とその弾幕を避けていく。
「止まれっ！！」
ピキンッ
「な……！？」
チルノが叫ぶと、散らばった弾幕が一瞬にしてその場に止まった！
「うぉっと！？危ね
「まだまだぁ！！」
「何！？　ぎゃあぁっ！！」
慌てる首領パッチに更に弾幕を撃ち込む。今度はダメージを受けた！
更に、止まっていた弾幕が動きはじめ首領パッチを追い詰める！
「首領パッチー！！」
「大丈夫だ！！　今朝レバニラ食ったから！！」
「いやどんな根拠！？」
とりあえずしばらくは大丈夫そうだ。
「何でだ？　単純な攻撃なのに……」
「……弾幕の密度が濃すぎるんだわ。下手な弾道でも数があれば逃

げ場は少なくなる。質より量ね」
「……私たちだったら簡単に倒せるのに」
「飛び道具、弾幕が撃てるからね。けど見ての通りアイツは完全に接近型。近づいて攻撃するのは指南の技……あのバカがそんな芸当出来るはずがないし、勝てる確率は低いわね」
「そんな……！」

霊夢の言うとおり、首領パッチはチルノとの戦闘、対弾幕に思ったよりも苦戦していたのだ。

「大丈夫だ」
「ボーボボ……？」
「アイツなら、どんな闘いでも気合いで乗り切っていける」
「何言ってるのよ。気合いでどうこう出来るものじゃないわ」
「いいや、それが出来るのさ」

「何故ならあいつも、一流の“ハジケリスト”だからな！」

ハジケリスト……ボーボボの言葉に首を傾げる二人。
だが、その答えはすぐに理解することになる。

「さっさとやられなさいよー！！」

今だに弾幕を撃ちつづけるチルノは、首領パッチがなかなか倒れないことに段々腹をたててきていた。

「くそ～……コイツはまだ取っておきたかったが、仕方ねえ！！
一気に決めてやるぜ！！」

そういって首領パッチが取り出したのは……コーラ。

「炭酸パワーーーッ！！」

首領パッチはそれを一気に飲み干した。喉痛くないのか？

「うおぉぉぉぉぉ……！！」

首領パッチの身体から電撃がほとばしる！

「ハジケパワーマァーーーーックスッ！！」

ゴオォォォォォォォォォッ

首領パッチの身体が金色に光りだした！！

「これは……！？」

「何なんだぜ、このパワー！？」

「な、なんなのよこれ～！？」

見たこともない強力なパワーに、一同驚愕！

「いくぜ！！ハジケ超奥義！！『バリバリバスター首領』ッ！！」

首領パッチは金色の弾丸となり、チルノに突進！　周りの弾幕も蹴散らしていく！

「そ、そんな……！！　サイキョーのあたいがぁーーー！！」

「何ふざけたこと抜かしてやがる！！」

「俺が東方一のヒロインだあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！！」

「「全然違うぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっっ！！！！」」

ズガァァァァァンッ

本当の主人公二人のツッコミとともに、首領パッチがチルノをノックアウト！！

ハジケで闘いの場を制す……それがハジケリスト！

「介錯！！」
ゴオォォォォォッ
「「熱っちゃあぁぁぁぁぁぁぁっ！！」」
「やり過ぎだぁぁぁぁぁっ！！」
ボーボボの火炎放射により、首領パッチとチルノは丸焼けになった。

「チルノちゃん……」
「ご、ごめんなさ〜い！　まさか溶けちゃうとは思わなくて……お詫びと言っちゃ何だけど、これ消費期限切れの卵」
「いりません」

ボーボボの火炎放射が原因で、氷の妖精であったチルノは溶けてしまい羽だけになってしまった。

「おい、そいつ大丈夫なのか？」
「はい、私たち妖精は自然から生命を授かっています。明日になればチルノちゃんも元通りですよ」
「結構強く生きてんのね、あんたら……」

妖精の生命力の高さに感心する霊夢。

「おい、大魔人」
「大妖精です。何ですか？」
「そのバカ妖精に言っておけ」

「リベンジはいつでも受けてやる。今度はもっとハジケてかかってこいってな！」

「……はい！」

チルノの代わりに、首領パッチの言葉を受けとめる大妖精であった。

「……！　みんな！あれを見ろ！！」

ボーボボは湖の向こうに何かを見つけ指をさした。

「……館……？」

そこには、紅い霧で不気味な雰囲気を漂わせている大きな館があった。

「霊夢、もしかしたら……」
「ええ、原因はあれね」
「あそこにゲーセンがあるってわけか……」
「いいや、きっとプルコギバーゲンセールをやってるに違いねえ！」
「「絶対違う」」

遂に、異変の元凶と思われる奇妙な館を見つけたボーボボたち。
そこには、果たしてどんなものが待ち受けているのか！？

名前：首領パッチ
読み：どん―――
種族：アルプス山脈の純粋な水に生息する妖精……らしい
特技：イロイロ

ボーボボの世界にてボーボボと共に旅してきたハジケリスト。元ハジケキングにしてボーボボの相棒的存在。容姿は絵に描いたオレンジ色の太陽みたいなのに手足が生えた感じ。トゲは“俺のチャームポイント”らしい。ハジケまくって敵をあっさり倒したりダメージ要員になってしまったりと、強かったり弱かったりする。好物はコーラ。

霧の湖で釣りをしていたボーボボと再会を果たす。その後何やかんやでチルノとバトルを繰り広げ、やや苦戦するも勝利。以降更にハジケるために（異変とは関係なしに）ボーボボたちと行動を共にする。どうやって幻想入りしたかはやっぱり不明。
“俺が主人公だ！！”と言いながら自分より目立っている者に対抗意識を強めるくらいに極度の目立ちたがり屋。そのせいか、目の敵としている（？）魔理沙とは相性はよろしくない。
完全ボケキャラにしてダメージ要員（笑）。これから敵の攻撃はたいてい彼に受けてもらいます（ヒデェ）。

本日お披露目☆中国拳法の極意　～トリプル役満で全員飛びじゃコラァ！！～

「みんな、この湖の向こう……あそこにある館が敵のねぐらよ！」
「グランマ……私たち、勝てるでしょうか？」
「弱気にならないで。大将は所詮、椅子で踏ん反り返ってるだけのニワトリ……恐れることはないわ」

グランマとその弟子……じゃなくて、ボーボボと首領パッチは魔理沙のコスチュームでコントをやっている。
それを見た魔理沙はショックを受けて若干涙目だった。

「さあ、行くわよ！　あの男の首を取るために！！」

ボーボボたちは持っていた箒の柄を背中にくっつけ、

箒を背に乗せ水平に飛んだ。

「「そうやって飛ぶのっっ！！！？」」

「……霊夢」
「……何？」
「私……一瞬だけ魔法使いやめたくなった」

「……ドンマイ」

首領パッチとの再会、チルノとの対決と様々なことがありながら、遂に異変の元凶と思わしき館を見つけたボーボボたちは、その館に向かって歩みを進めていた。

湖を乗り越え、現在彼らは館の前まで来ていた。

「……真っ赤だ……」

「近くで見ると余計不気味ね……」

その館は、屋根や壁とピンからキリまで紅に染められていた。正直、建設者のセンスを疑いたくなる。

「ねーねーママー、あそこでお姉ちゃんが立って寝てるよー」

「しっ！見ちゃダメよパチ郎ちゃん！　邪魔しちゃ悪いから早く帰りましょ！アイス買ってあげるから！」

「ハ～イ！」

「……おい、そのまま帰るんじゃないだろうな？」

「「ギクゥッ！？」」

入口だと思われる大きな門の前でコントをするバカ二人。

その門前には、確かに人が一人いた。“龍”と書いてある星の付

いた緑の帽子に同じ色のチャイナ服をきた、赤い長髪の女性だった。
その女性はあろうことか、門の前で器用に立ち寝をしていた。

「……門番か？」
「どうやらそうみたいね」
キュッキュッ
「プクク～！額に“肉”とかどんだけぇ～！」
「いや何やってんだよ！？」

首領パッチがペン（油性）で落書きをしても門番は起きる気配はなかった。

「ま、いいか。寝てるっていうなら勝手に入らせてもら
「サンデーモーニング！！」
ドゴォッ
「あべしっ！？」
「っておいいぃぃ！！何やってんだぁぁぁぁぁ！！」

こっそり侵入しようとした時、何故か門番を蹴り飛ばしたボーボボ。

「オラァ！！起きろや中国ァ！！」
ゲシゲシゲシゲシッ
「ちょ、痛！！な、何事ですギャッ！？てか中国いわないで痛！！痛いイタいっ！！」

首領パッチの追撃によって門番は完全に起きてしまった。

「ちょっと！折角今のうちに侵入しようとしたのに起きちゃったじゃない！！」

「ちょっとちょっと！誰よ中国起こしたのは！？」
「ホント、迷惑だわ！」
「お前らだよ！！」

霊夢のコスプレでシラケるバカ二人に魔理沙は怒りのツッコミ。

「な！あなたたちは何者ですか！？」
「すみませ～ん！私たちＢＢＢテレビ局のものなのですが」
「是非ともこちらの館を取材させていただきたく候！」
「嘘言わないでください！！聞いたことないですよそんな局！　ていうかダメです！！」

門番さんは常識のある人でした。
ちなみに額の“肉”はいつの間にか取れていた。

「……改めて聞きます。あなたたちはこの館にどのような用事で来られたのですか？」
「「ヒーローショーを見に来ました！！」」
「全然違うから。そうね、単刀直入に言うわ」

「この迷惑な紅い霧を止めたいんだけど、あんた何か知らない？」

「……！」
「……当たりのようね」

“紅い霧”に反応した門番を見て霊夢は確信した。
異変の元凶は、この館の中にいる！

「じゃ、内容を言ったから入らせてもらうぜ」
「おじゃまし～す」

「『震脚』！！」
ドォンッ
「うぉっと！！」
「ぎゃあぁっ！！なんで俺だけ！？」

門を通ろうとする前に門番が攻撃して阻止する。魔理沙は避けたが首領パッチは踏まれた。

「紅い霧を止める……それ即ち我が主の邪魔をすること。この館へ立ち入ることは許可できません……」

「通りたいならば、この紅魔館門番、紅（ホン）美鈴（メイリン）を倒してからにしろ！！」

門番、美鈴は身構えボーボボたちに敵意を示す！

「……やるしかないようだな」
「はあ……やれやれ」
「仕方がないぜ」
「上等だ！！フルボッコにして東京湾に沈めてやんよォ！！」

結局めちゃくちゃな展開になったが、ボーボボたちのやる気は十分だ！

「さあ……来い！！」

「『拡散アミュレット』！！」
「『メテオニックシャワー』！！」
「鼻毛真拳奥義！！『ＲＰＧ７』！！」
「ヒャハハハハハハ！！逃げろ逃げろォ！！」
ズダダダダダダッ
「全部飛び道具だぁぁぁぁぁ！！」

いきなり容赦なし。美鈴、成す統べなし。

「ちょっと！！みんなして卑怯ですよ！！」
「私はスペルカードルールに乗っとって弾幕使ったまでよ。卑怯も何もないわ」
「同じく、だぜ」
「ロケランは男のロマンだ！」
「フン、雑魚が吠えよるわ！！」
「腹立つぅーーー！！最後の奴腹立つぅーーー！！」

悪びれない４人（ていうか首領パッチ）にイラつく美鈴。

「く……だったらこちらも弾幕を撃つまでです！！」

すると美鈴は、刃の形をした色とりどりの弾幕を展開！それはさながら綺麗な虹の如く！

「……ふん」
「当たらないぜ！」

しかしそれは当たることはなく、少女二人は軽々と避けていく。

「まあ、綺麗な弾幕！　ねえやっくん、来年もまた来ようね♪」

「お星様になれェッ！！」
ドガァッ
「ああ！！やっくん！！」
ベシャッ
「あぶっ！？」

首領パッチの大切な彼氏（？）のやっくん（人形）を蹴り飛ばす
ボーボボ。そのまま美鈴にヒット！

「今だ！！　鼻毛真拳奥義！！『鼻毛激裂拳』！！」
ズダダダダダダダダダッ

そのまま美鈴に攻撃を叩き込む！！

「……甘いですよ」
「な……！！」
「破ッ！！」
ドォッ
「ぐあぁっ！？」

だがそれは全て防がれ、反撃を喰らってしまう！

「私、弾幕よりも接近戦の方が得意なんですよ」
「見りゃ解るっつーのバカ」
「『芳波』！！」
ズダダァンッ
「ぎゃあぁっ！！」

首領パッチ、無駄にダメージ。

「じゃ、こっちは卑しく弾幕で攻めようかしら」

「私も！」

ダダダダダダダダダッ

「う……！！」

その隙に霊夢の針と魔理沙の星の弾幕が美鈴をとらえる！

「……ヤァッ！！」

ドォンッ

「な！？強引に……！！」

美鈴は気合いで弾幕を押し切った！

「意外とタフなのね」

「それだけが取り柄ですから」

「こりゃあ一筋縄じゃいかないぜ……」

「まだまだぁ！！攻めの手を緩めるな！！

奥義！！『肉まん天国G』！！」

肉まん肉まん肉まん肉まん肉まん肉まん肉まん肉まん肉まん肉まん肉まん肉まん肉まん肉まん肉まん肉まん

「美味しそうな弾幕出たーーー！！」

「はへほほおほあふいひあいへふあはい！！（食べ物を粗末にしないでください！！）」

「全部食ってるぅーーー！！」

美鈴のＨＰが５０×１８回復した！！

「ングング……味がイマイチですね。本物の肉まんはこういうものです！！」
バァンッ
「！！　これが究極の肉まん……！！」
「ウマいぞォォォォォォッ！！」

「アンタも立派な肉まん抱えてるじゃない！！しかも２つも！！」
「な！！何言ってるんですか！？／／」
「ムキーーー！！ヒロインでもないクセして！！私にも寄越しなさいよ！！できれば全部！！」
「や、止めてくださぁ～い！！／／」

「セクハラ！！」
「「ぎゃあぁっ！！」」

美鈴の料理に感動する首領パッチ。嫉妬する霊夢と顔を赤くする美鈴を蹴り飛ばすボーボボ。

「ああ……またこの展開……」

うなだれる魔理沙。またもやバトルはいつものハジケペースに持っていかれた。ハジケリストたる所以の宿命である。残念ですがもう諦めてください。
ていうか霊夢さん、もう立派なハジケ組の仲間入りですね。

「『疾歩』！！」
「『猫のシッポ』！！」

「和むわ～……♪」
「く……『虹雷烈破』！！」
「再び『鼻毛激裂拳』！！」
ガガガガガガガガガッ
「チィ……！！」
「今だ！！　奥義！！『パンダ天国G』！！」
パンダ
「パンダの大行進だぁーーー！！」

「ワギャア！！」
バキィッ
「ぶべらっ！？」
「何で俺までェ！？」
「パンダって危険なんだな……」
「まあ“熊猫”と書いてパンダだし……あれ？“猫熊”だっけ？」

次々と必殺技を繰り出す美鈴だが、ボーボボたちのハジケ攻撃の前ではほとんど無効果されていた。

（この調子では無駄に気力を減らすだけ……ならば！！）

美鈴は隙を見て一度距離をおいた。

「一気にカタをつける！！」

構えて集中し、体内にある己の気を練り上げていく。

「……！？」
「何だ……この威圧感……！？」

「いやぁ～パチ美怖いぃ～！」
「お前うるさい」
ゲシッ
「あだっ！？」

美鈴の気は、霊夢たちが立ちすくんでしまうくらい強大になろうとしていた。

「天・上・天・下・唯・我・独・尊！！」

ドオォォォッ

美鈴が高らかに唱えると同時、彼女から“気”が一気に解放される！

「……なんて力だ……！！」
「やべえぇぇぇぇぇ！！勝てる気がしねぇぇぇぇぇ！！」

ボーボボすらも冷や汗を流してしまう。首領パッチは……まあいつも通り。

「……」
ギロッ
「ぎゃあぁぁぁぁぁ！！こっち見たぁぁぁぁぁ！！」

美鈴が選んだ最初の標的は、首領パッチ！！

「『星脈弾』！！」
バシュウッ
美鈴は巨大な光る弾幕を放った！　気を解放している分、通常よりも格段に速い！！
「チィッ……こうなったら！！奥義『腋巫女ガード』！！」
「残念、それこんにゃく」
「え〝っ！？」
ドォンッ
「ぎゃあぁっ！！なんで俺こんなにダメージ要員！？」
美鈴は攻めの手を緩めない！！
「『天昇嵐華』！！」
ゴオォォッ
「グッ……このぉ！！」
キンッキンッ
「！！　針が弾かれた……！？」
「どいてろ霊夢！！『マスタースパーク』ッ！！」
ドオォォォォォォッ
「だからなんで俺までぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！？」
「……ァァァアアアッ！！」
「ゲゲッ！！無理矢理突っ込んできた！？」
「『閃花八点掌』！！」
ダダダダダダダンッ
「う……くうぅっ！！」

「魔理沙ー！！おのれー！！
鼻毛真拳奥義！！『ボーボボ中華天国』！！」
タンメンタンメンタンメンタンメンタンメンタンメンタンメンタンメンタンメンタンメンタンメンタンメンタンメンタンメンタンメンタンメンタンメンタンメンタンメン
「そのシリーズ三回目ェーーー！！そしてタンメンだけだーーー！！」

「……不味い」
「やっぱり全部食べたーーー！！」

美鈴の力と技による止まることのないラッシュで、ボーボボたちは苦しめられていた。

「まずいな……強力な近接攻撃、かと言って弾幕はあんまり効いてない。私のマスパ喰らってもあれじゃな～」
「かくなる上は、こっちも近接攻撃で叩くしかないわね。けど……」

霊夢は顔をしかめる。確かに弾幕は効いていないが、全くもってというわけではない。そのままマンネリ勝負をしていればいずれは勝てるかもしれないが、美鈴のドーピングがいつまで続くかわからないし、第一こちら側の体力の問題もある。
確実にダメージを与えるには、こちらも近接攻撃で対応してみるしかない。が、美鈴にダメージを与えるのはおろか、あのボーボボですら近づけないでいるのが現状だ。

「一瞬でも隙をつくれればいいけど、どうするか……」
「……よし、ここは作戦“ＤＩＳ”だ！」
「ＤＩＳ？」

「D：首領パッチを！！」
ガシッ
「ん？」
「I：生け贄に
S：捧げる！！」
ポイッ
「え！？ちょ、待てやアァァァァァァァァッ！！」

ボーボボは美鈴に向かって、奥義『バカボール』を発動！！

「……奥義……」
「ほら何か奥義って呟いてますよ！！俺完全に死亡フラグじゃん！！ねえちょっと！！」
「『彩光蓮華掌』！！」
「くそぉーーー！！『首領パッチシールド』！！」

奥義を繰り出す美鈴に首領パッチは最後の悪あがき！
が、

シャキィィィィンッ

「……やっぱ……“はんぺん”じゃ……無理だった……ゴバァッ！！」

抵抗虚しく、首領パッチは虹色に爆ぜた。

「確かに、隙が出来たわね」
「！？」

その時、美鈴に電流走る……！！
気づいた時には、目の前に霊夢が現れていたのだ！

「喰らいなさい！！『天覇風神脚』！！」
ズガァッ
「くあぁっ！！」

霊夢はそのままサマーソルトを連発！
期待通り、美鈴にダメージを与えた！！

「たあぁっ！！」
ズガァンッ
「グフ……！！」

最後に美鈴を天高く打ち上げる！

「『スターダストレヴァリエ』！！」
ズガガガガガガガッ
「かはぁ……！！」

更なる追撃！魔理沙が箒に乗り回転しながら、彗星の如く突進！！
もちろん、これでは終わらない。最後に決めるのは……！！

「今だ！！ボーボボ！！」

「鼻毛真拳奥義……！！」

ボーボボ……！！

バシバシバシィンッ

「『天和・大三元・四暗刻、
４８０００オール』！！」

「「グアァァァァァァァッ！！」」

ボーボボの鼻毛真拳で止めを刺す！！

……霊夢たちもろとも。

ドシャアッ

「うっく……！！」

「グ……オイィ！！何で私たちまで攻撃したんだぁ！？」

「ウザイ」

ボーボボ以外全員ボロボロになったが、見事美鈴を撃破した！！

……かに思われた。

「くうぅ……！！」

「！！　まだ立ち上がるか……！？」

なんと、美鈴は気絶すらしていなかった！

「まだです……まだやれます！！」

「……もう止めておくんだ。俺達はお前を倒しに来たんじゃない。

この霧を止めにきたんだ」
「だっ……たら……尚更、く……通せません！！」
「……死ぬぞ」
「ここで諦めても……どうせ私は

ザクッ

「う……――　」

バタ……

「！！」

突然、美鈴は無抵抗に倒れた。
ボーボボは何もしていない。霊夢も魔理沙も首領パッチも。
答えは明らか。
美鈴の額に突き刺さった、一本の銀（ナイフ）が物語っていた。

「……役立たずは切り捨てる、か……」
「……一瞬、マジで怖くなったぜ」
「けっ、胸糞悪ぃな」
「……」

謎のナイフ攻撃によって消された美鈴。原因は恐らく、眼前にある紅い館……この中にいる誰か。
内心不安を隠せぬボーボボたち。果たして、この館には一体何が

待ち受けているのか？

「……うう～、咲夜さんひどいですぅ～。今ので間違いなくクビにされたぁ～」

ちなみに倒れた門番が涙しながら嘆いていたことをここに記しておく。

名前：ルーミア
読み：――――
種族：妖怪
能力：闇を操る程度の能力

魔法の森でうろついている妖怪少女。見たかぎりでは自由気ままで能天気。だがお腹が空いたら人間を食べようとする単純無垢な思考は周りにとっては恐ろしい。実際、腹を満たせれば食べるのは人間じゃなくてもいいようだ。
今回もお腹が空いたので偶然出会ったボーボボたちに襲い掛かる。善戦はしたものの最終的に自分の能力で墓穴を掘り、ボーボボに倒されて気絶した。
頭に結んでいるリボンは封印の札の役割をしているらしく、それは誰にも外せず自らも触れない。万が一外れた場合、力が解放されてとんでもなく恐ろしい妖怪となる……らしい。
なかなか面白い設定を持っているので機会があればもう一度出したいです。

名前：さるの（嘘）
読み：チルノ
種族：妖精
能力：冷気を操る程度の能力

霧の湖を縄張りとしている氷の妖精。彼女の周りからは常に冷気

が発せられており、近づくと寒い。妖精の中では強クラスなので周りの妖精たちからは慕われている。プライドが高くて負けず嫌いのため「バカ」という単語には敏感。しかし事実おバカさんでどんななぞなぞにも答えられない。「１＋１は？」という質問に「３６５」と答えるくらい。

自分の縄張りに入ってきたボーボボたちにケンカを売るがあっさりと切り返されイライラする。対戦相手となった首領パッチを追い詰めるも、ハジケ攻撃により逆転負け。ボーボボの火炎放射で溶けてしまった。

上海アリスさん、何故彼女に？なんてつけたんですか。

単純キャラなだけに逆に動かしづらい面が……。私の好きなキャラの一人でもあるので再登場させたいですね。

名前：大妖精（仮名）
愛称：ダイちゃん
種族：妖精
能力：不明

チルノとよく一緒にいる、妖精の中では上ランクの妖精。

基本しっかり者な性格でチルノの世話係みたいな役割。だがボーボボや首領パッチのコスプレを見てチルノと勘違いするあたり結構天然のようである。

本来妖精とはあらゆる自然の中から生命を授かって生きる存在のため、例えその身を失おうとも一日程あれば元の姿を取り戻すことが出来る。他の種族と比べて弱い点、妖精最大の利点である。

再登場させるなら多分チルノとセット以外ないと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4745p/

東方鼻毛伝説

2010年12月23日14時21分発行